

## 平成29年度第9回霞ヶ浦自然観察会実施結果報告

### 「自然再生地の湿生植物を学ぶ」を実施しました。

開催日時：平成29年11月25日（土）午前9時00分から午後3時00分

開催場所：土浦市田村町～沖宿町（霞ヶ浦湖岸自然再生 A,B,H 地区）

参加者：19名

今回の観察会は霞ヶ浦環境科学センターに近い土浦市田村町から、かすみがうら市戸崎の間の湖岸で行われている自然再生事業のうち、施工が終わった自然再生 A,B 地区と現在施工中の H 地区での植物観察を行いました。

自然再生事業は昔の霞ヶ浦湖岸線に広がっていた多様な水辺の植物やそれに依存する生き物の生息場所を再生するために行っているものです。すでに完成した A,B 地区では貴重な植物も観察され、環境学習の場としても利用されています。

当日はまさに小春日和で、観察会にもってこいの一日でした。講師は植物の観察会でいつもお世話になっている福田先生。また今回は、この場所で月に1回の植物定点調査を行っている当センター植物グループの皆様からもいろいろなお話をお聞きしました。

午前の観察は、すでに完成後、時間の経っている A,B 地区を観察しました。特に A 地区は完成後10年近く経過しています。福田先生の話によると5年前にはヨシが優占していた場所でオギが優占してきていることから徐々に乾燥化が進んでいるとのことでした。自然に任せると、やがて植物残渣などの有機物が堆積し、陸地化が進んでいくそうです。昔はヨシを茅葺屋根の材料として利用したり、水草を肥料として利用したりしていたため、水辺環境を維持することができ、有機物を湖外に持ち出すことから水質浄化にもなる循環型環境社会が存在していました。それらが利用されなくなると、水辺の環境を維持・保全するのは大変であることを参加者のみなさんも実感したようでした。

午後の観察はセンターから自然再生 H 地区まで、ハス田わきの植物も観察しながら徒歩で移動しました。H 地区はまさに大型重機が入り、砂を入れて湿地を再生する作業が休みなく続けられていました。この砂は霞ヶ浦のものなので、かつて霞ヶ浦で見られたものの、現在では見られなくなった植物の種子が残っていて、それが再び芽吹くことが期待できます。一方で繁殖力が強く、攪乱初期の環境にいち早く定着する特定外来生物のミズヒマワリがすでに多く見られ、水際の大事な部分を覆ってしまっていることから、他の植物の成長を阻害する懸念もあります。またこの場所には以前から貴重なヤナギトラノオの自生地があり、それらを保全しながらの作業が進められていました。

自然再生地区を維持し、保全していくためには多くの人々が関心を持ち、その植生を観察し、保全活動に参加することが重要であることを実感しました。

参加されたみなさん、福田先生、観察会実施に多大なご協力をいただいたパートナーの有吉さん、杉山さん、吉川さん、本当にありがとうございました。

観察会の様子の一部を紹介します。



自然再生 A 地区で解説される福田先生。



自然再生 B 地区の様子です。



ガマの見分け方の説明（写真はコガマ）



H 地区の概要を確認します。



完成後の姿を想像しながら観察しました。